

## 30

## 難波抱節旧蔵『医事古言』について

清水 信子

二松學舎大学文学部／北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部

## ○難波抱節と旧蔵書

難波抱節（1791～1859、名は経恭）は江戸後期、郷里備前を中心に活動した漢蘭折衷医である。京都で吉益南涯に内科を、賀川蘭齋に産科を、大坂で華岡青洲、鹿城に外科を学び、医業の傍ら家塾思誠堂にて医学漢学を講述し、また緒方洪庵から種痘術を学び、種痘の普及にも努めている。

抱節とその子経直を中心とする難波家旧蔵資料は、元来、労働科学研究所に「温知堂文庫」（「温故堂文庫」の誤り）として1,091点（医書関係770点、医書以外321点）が蔵されていたが、2015年、同研究所より市場に出され、現在、医書関係の多く約600点強は武田科学振興財団杏雨書屋に収蔵されている。漢学関係資料については、現在特にまとまっては収蔵されておらず、散逸している状況である。該資料群は、抱節や経直の稿本や写本、書入のあるものが多く、難波家の医学修学過程、また同時代の医学の受容状況が知られるものとして有用であり、筆者は以前より調査しているが、その中で今回、吉益東洞（1702～73）の著『医事古言』を紹介する。

## ○『医方古言』と『医事古言』

『医方古言』は東洞が中国の経書子書などから医学関連の記事を抄録し、自身の見解を付した医論集で、写本として伝わる。別に「医事古言」と題するものもあり、文化二年（1805）に刊行された東洞の『医事古言』の稿本とされるものである。同書はさらに増補改訂され、文化十一年に『古書医言』として刊行される。これら三書の詳細、関係性については館野正美氏による研究がある。

『医方古言』の諸本は管見では23点現存し、書写時期が判明する最も早いものは、東洋文庫蔵天明七年（1787）原尚徳写本である。各本は書名や著者表記、引用文の多寡やその引用順など多少なりとも異同があり、複数の伝写系統があったと推察される。

## ○抱節旧蔵本

抱節旧蔵『医方古言』は二点あり、いずれも書名は「医事古言」とする。そのうち一点は抱節自筆本で、書写識語に「文化九歳以壬申初夏十八日夜書于平安僑居 難波恭子敬」とあり、文化九年（1812）、京都遊学中の吉益塾にて原本を借受し移写したものである。よって『医方古言』諸本の中でより東洞の原稿に近いものと言えよう。またこの時すでに『医事古言』は刊行され、当然ながら吉益塾にも蔵していたであろうが、抱節があえて稿本を借覧書写したことは、刊本より有益と判断したためであり、この点でも注目すべき資料である。

基本的書誌事項として、書名は表紙に打付書にて「医事古言」とあるが、本文巻頭第一行は空行で内題はなく、次行に「日本 吉益為則撰」とある。なおこの著者表記については、諸本の多くは「日本藝陽 吉益為則公言撰」と刊本『医事古言』と同表記である。著録内容は前付けとして引用書目があり、続いて本文となる。末には「角惟能記」とする「附録」があり、『南海寄歸内法伝』巻三「二十七先體病源」と『涅槃經』を引いている。この「附録」は諸本では文化十四年（1817）の書写識語のある東大鵬軒蔵本にもあることから、該本とは同系統の写本とみられる。

著録内容については、諸本各々大同小異であるなか、抱節写本の場合は他本より引用文献が多い一方、引用文に省略があったり、また他本にある引用文の重複箇所は省かれていたり、他本との異同が比較的大きく、それらについてはさらに詳査しなければならない。

『医方古言』諸本については、抱節写本はじめ各本の著録内容を整理し、諸本全体を比較対照し、まずは書写系統を明らかにし、さらには『医事古言』『古書医言』への成立過程について検証していきたい。

（本発表は、公益財団法人武田科学振興財団2015年度杏雨書屋研究奨励「近世後期における医家の学問に関する基礎的研究—難波抱節旧蔵資料を中心として—」による研究成果の一部である。）